
あまつかみ ~天つ鬼~

消炭灰介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あまつかみ～天つ鬼～

【NZコード】

N9357M

【作者名】

消炭灰介

【あらすじ】

謎の少年、縁・エニシ・ 最強の男、夜・ヨル・ 異人の少女 - ムラサキ - 三人の物語。

序言

独りだった。

最強の名を恣にする彼の前には誰も残らず。

斬つても斬つても満たされぬ渴きと飢えを感じながら、それでも彼は人を超えた者との再会を求める刀を振るい続けた。

独りだった。

異形と呼ばれた彼女の前に足を止める者はおらず。

訪れては過ぎ行くとこしえに近しい時から目をそらして、ただ彼女は彼女の美しさに見惚れていった男たちを想つて涙を流した。

独りだった。

家の業を捨てた彼を擁護する人間など存在するわけもなく。

決して皆が幸せになることのできない世を呪い、何度も倒れかける現身を必死に支え、夜行を根絶やしにするためだけに植えつけられた左手ですき腹を抱えながら歩き続けた。

独りだった……三人が出会うまでは。

序言（後書き）

てな時代小説を書きたいな、と思つた次第でして（時代小説なんてかけるのか？俺）

まずは時代小説を読むところから始めねば。

まあ、構想を固めつつぼちぼち、やっていきたいと思します。

『恣』は『ほしこまゆ』

『業』は『じゆ』

『現身』は『うつしみ』

と読ませます。雰囲気が壊れるのは嫌だったので振り仮名はふりませんでした。

渡る世間に鬼は居ない

浮いた刃紋は木目状、淡い枯茶色の刀身はおとなしい色彩であるにも関わらず、見るものに趣と美を感じさせ、鮮烈な印象を与える。

振り上げた切っ先は縦一文字に振り下ろされる。

刃はよどみなく人体を分断し、斬られた浪人は断末魔をあげるとすら叶わず二つになつて地面に伏した。

同様の死体が他に二つ、血しぶき舞う中、男は踵を返し、刀を腰の鞘に納める。

その容貌は異様だつた。上から下まで黒尽の袴姿、伸びすぎた髪を無造作に頭の後ろでまとめられた惣髪、六尺（約百八センチメートル）を超える体躯であるのにも関わらず帶刀する刀の刃渡りは一尺（約六十センチメートル）強ほどしかない。そして、隻腕。そう、この男は左腕一本で、傷一つ負わず、迫り来る三人の浪人を切り伏せたのだ。

「怪我はないか？」

ただ一本の手を差し出して男は問う。

「ああ、すまない、助かった」

少女はその手をとり言つ。だがその声にはまつたく礼の心も侘びの心もこもつていない。まるで助けなど望んでいなかつたかのように。

少女の容貌も異様だつた。銀髪に黄金の瞳、身なりこそ簡素な小袖姿だったが、一目で異人と分かる出で立ち。

しかし、美しい。異様であることを全く気に留めさせない美しさが少女にはあつた。少女の顔立ちは綺麗と称するには幼く、愛らしくと呼ぶには大人びていて、妖しいまでの魅力と共に危うさを潜めていた。

なによりの異質が、この少女、目の前で三人の男が惨殺されたにも関わらず眉一つ動かさない。

ざわ、と茂みが揺れる。少女が立ち上がったのと、気配に気づいたのは同時だつた。

腰をかがめ、踏み込みは一步、居合の要領で刀を引き抜き、男は茂みの中の人物の目前に切つ先をかざす。

「ちよつ、待つた」

はらり、と斬られた枝が地面に落ち、茂みに隠れていた人物が浮き彫りになる。

がさ、と草木を揺らす影 少年は両手を挙げ降参を表しながら立ち上がる。

髪は結わらず、ざつくり切つただけのような髪は整えるといつ言葉を知らないようだとこじらどこじら逆立つてゐる。特に田を引くのは一つ。一つは左手の先から肘にかけて巻かれたさらし、もう一つは背に負つた、自らの背丈を優に超える七尺弱の野太刀。

少年は肌色の手と白い手を挙げたまま、ゆつくつと男たちと距離をとる。

「何者だ？」

男は悠然と問う。

「いや、俺は偶然通りかかつただけで……」

必死に笑いを浮かべ少年は弁明を図る。

しかし、男の敵意たっぷりの視線に射すくめられ、肩をすぼめ萎縮する。

「やだなあ、おっさん。そんなに見つめないでくれよどきしちゃうじやんか」

あはは、と必死に少年は愛想笑い。

しかし喉元に突きつけられた切つ先から殺意は消えない。

「あ、まちがつた。おにーさん」

あは、あはは、と今度は一倍増しで愛想笑い。

「ツ！」

隙は一瞬。少年は男の刀をすり抜け、一気に間合いを詰める。男の対応はまったく間に合わない、少年はそのまま男めがけて突進

とみせかけて男の脇抜け。田指す先は、先ほどの銀髪の少女。そして人質にとる。わけではない、少年は少女に駆け寄るとその白い手をとると、ふむふむ、としきりに額きながら少女の姿態をまじまじと観察する。まったく反応を見せない少女のに肩に触れ、頭に手を乗せ、最後に少年は自身の顎に手を当て何かを考えるそぶりで少女の金色の目を覗き込む。そして、

「惚れた！」

声高らかに宣言した。

少女は無反応。

少年は「あれ？」と笑顔のまま首を傾げる。

跪いて、少女の手をとつて、田を見据えもう一度。

「俺は貴方に惚れた。というわけで命を懸けて貴方を護ります」

尚も少女は無反応。

「うわっ！」

ちょうど、少年の頭があつた位置を、木目状の波紋が浮く刃が通り抜ける。

「おい！ いま避けなかつたら首が飛んでたぞ！」

あわてて少女の背に隠れ、少女の両肩に手を乗せつつ少年は抗議する。言つたそばから少女との約束は破られた。

「ほう、今のも躲すか。お主、何者だ？」

「え、縁」

少女の肩口からひょつこり顔を覗かせ少年は答える。

「縁？ 聞いたことないな、どこの家の者だ？」

男は片手で持つた刀を縁と名乗つた少年の目先突きつける。

「家？ そんな由緒正しい家の人にじやねえよ」

「嘘……だな、ならその背中の獲物はなにか？」

縁に敵意なしと判断した男は、切つ先を縁から反らし、縁の背の

野太刀を示す。

「あ、これ？ じつちゃんの形見だ」

縁は野太刀の柄を掴んで粗末に答える。

「俺はしつてるぜ、おっさんのこと」

びし、と無礼に縁は男を指差す。少女の後ろから。

「私もだ」

少女も口を挟む。

うんうんと頷き、少女に同調しつつ縁は言葉を続ける。

「夜^よ……だろ？ 間本武蔵を斬つたって。地上最強の兵法^仁だつて
ちまたじやもつぱりの「わざだ」

夜と呼ばれた男は口元に虚無的な笑みを浮かべる。

「そうか、知つてあるのなら話は早い」

言いつつ、夜は片手で刀を構える。両腕が揃っていたのなら正眼
やや左。しかし、隻腕の夜のその構えは異様の一言に近づく。それ
は鬼氣か邪氣か、夜からとめどない圧を感じさせた。そして夜は
言葉を続ける。

「わしと仕合^{つわ}つてもらいたい」

「やだね」

即答。

「何故？」

「手合^{てあ}わせではなく、仕合^{つわ}つてのは？」

「無論。わしと殺しあつてもらつ」

少女の肩から手を離し、縁はかるく背筋を凍えさせる。

「やだね、手合^{てあ}せでも俺は「ごめんだ」

野郎に興味はねえ、とばかりに夜を無視して縁は少女に向き直る。
興味なしと判断され、ふつ、と笑いのような溜息を吐ぐと、夜は
刀を納める。

「それより、どこに向かってるんだ？」

呆れるように歩き出した少女を追い、その横顔を覗き込みながら
縁は問う。

「私は……とりあえず、北へ」

「北か。よし、じゃあ俺も北へ行く予定だつたんだ。途中まで一緒
に行こう」

「断る」

少女は横柄に答える。

「そんなこといわずにさ、な？」

それでもめげない縁。

「ほら、おっさんも」

縁は夜の腕を引く。

「そうだ！ 名前、まだ訊いてなかつた

「私は……」

吹き抜けた風に少女は目を閉じる。美しい銀髪一本一本を風が攪
い、陽に反射してあたりに光を振りまく。

少女は目を開けると、言った。

「……紫」

金色の瞳はまっすぐ前を捉える。

「紫か、いい名前だ。よろしく。おっさんも」

にっこり笑顔で言うと、紫と夜の手をとり無理やり握手をする。
かくして、縁、紫、夜の奇妙な三人旅は始まったのだった。

渡る世間に鬼は居ない（後書き）

あまつかみ豆知識「一ナーナー！」

第一回～長さについて～

紫「縁、なにか始まつたぞ」

縁「ん？　ああ、ここは作者が毎回、本編では説明できなかつた設定やら時代背景やらを俺たち三人が語つていく「一ナーナーだそうだ」

紫「こらこら、「一ナーナーなどを安易に使うな、作品の雰囲気がブチ壊しではないか」

縁「ならお前もブチ壊しとか言つなよ……。ちなみにいいじでのお話は本編の流れとはまったく関係ないので平氣だ」

紫「私たちが喋ること 자체が軽いネタバレになつていいがな。それより、夜の姿が見えんが」

縁「それは大人の事情というやつだ」

紫「それではしかたがないな、一人だけで進めるにしよう。なにに？　第一回のお題は『長さについて』？　まつたく消炭の奴も困つたものだな、長さくらい作中で説明しろといつのに」

縁「まあ、あいつの技術力の低さは認めるが、世界観を考慮した苦肉の策なんだ。こうして俺たちの出番も増えたことだし許してやつてくれ」

紫「で？」『長さについて』「私たちは何を話せばいいの？」

縁「この作品は（一応）時代小説というくくりにあるからモノの単位はそれに則つていい。メートルとか表現すると世界観ブチ壊しだからな、そこで登場するのが『寸』『尺』『丈』『間』」

紫「四つだけか？」

縁「まあ、本当はもっとあるんだが、作中に出てくるのはたぶん四つくらいだ。これら四つの長さは『尺』は1メートルの33分の10。『寸』は尺の10分の1。『丈』は尺の10倍。『間』は尺の

6倍といふうに決められている「

紫「なんともめんどくさいな」

縁「簡単にまとめる

一寸=約3.03センチメートル

一尺=約30.3センチメートル

一間=約1.18メートル

一丈=約3.03メートル

といつたところかな」

紫「ふむ、つまりは夜の背丈は『六尺を超える』だから正確には181センチを確實に超えているということになるのだな?」

縁「そこまで重箱の隅をつかなくても……。俺たちの時代は画面の向こうの世界と比べると平均身長がかなり低いからおっさんがいかに大男かということがわかるな。ちなみに俺の身長は五尺七寸。約170センチくらいだ。おっさんと並ぶと小さく見えるかもしれないが、この時代からしたらけつこう大きいほうだぞ」

紫「うむ、もつと正確に近づけると約172.71センチメートルだな」

縁「……俺の背負つてる刀は七尺弱だから、おっさんよりも大きい」

紫「いつも思うのだが、それは重くないのか?」

縁「や、けつこう重いんだこれが、だからいつも右肩からかけたり左肩からかけたりして肩にかかる負担を減らしてる」

紫「そうなのか? まったく気づかなかつたぞ」

縁「あんたは俺に興味がなさすぎだ! ……あと気をつけてほしいのが俺の刀は全長が七尺弱で、おっさんの刀は刀長(刃渡り)が二尺強だということだ」

紫「うむ? それはどう違うのだ?」

縁「俺の刀は柄も入れた長さだけ、おっさんは純粋に刃の部分の長さだつてこと」

紫「また、消炭のやつめ、めんどくさいことをしあつて」

縁「まったくだ、俺にもあいつのこだわりは理解できない。ちなみに

に、俺の刀は柄の長さが一尺ほどあるから刃の部分はそこまで長くはない。とはいっても全長の割りにという意味で、普通の刀の企画から考えたら十分にながいけどな」

紫「お、おい！ 縁！」

縁「なんだ？」

紫「ここを見る」

縁「ん？ なになに……刀のことについては次回話す予定だからあまりしゃべらないように？」

紫「……ついに、やってしまったな縁」

縁「ついにって何！？ ああ、いつかやると思つてましたってか！？ てかそんな田で見るな！」

紫「はあ、いたしかたない」

縁「……？」

紫「……では、次回。また会つ田まで」

縁「あ～！ 勝手に終わらせや（以下強制終了）」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9357m/>

あまつかみ～天つ鬼～

2010年12月19日00時10分発行